

風姿花伝第三、問答条々

一座敷を見て吉凶をかねて知る事

問。^{そもく}抑、申樂を初るに、^{はいむ}

当日に臨^{のぞ}んで、先、座敷^{ざしき}を

見て吉凶^{かね}を予て知る事は、

如何なる事ぞや。

答。此事^{このこと}一大事なり。其道

に得たらん人ならでは、心^{こころ}

〔口訳〕

問。一体、能樂を演ずる際に、その日その時に当つて、先づ見物席の様子を見て、その日の能の成功するか否かを予知するといふことは、如何なる事でありますか。

答。これは非常に重大な事であつて、能樂の道に達得した人でなくては、容易にわからないものである。先づ、そ

得べからず。先その日の庭
を見るに、今日は能、善
く出で来べき、悪しく出で
来べき、瑞相有るべし。是
申がたし。然ども、凡の料
簡を以て見るに、神事、貴
人の御前なんどの申樂に、

の日の見物席の様子を見ると、今日は
能がうまく成功するか、失敗に終るか
の前兆が、きつとあるものである。こ
れは所謂勘で知れるもので、口では説
明し難いものだ。しかし大体の見当を
つけて見ると、神事能や貴人の御前演
能などに於て、見物人が群集して、見
所が騒々しいものだが、その中に、出
来るだけ見所の静まるを待ち、見物
人一同が演能を待ち兼ね、万人の心が
一致して「未だ始まらぬか」と楽屋の
方に注意を向けるその際に、その機会
を外さずに出場して、一声をも謡ひ出

人群集して、座敷未だ静ま
らず。去る程に、如何にも
く静めて、見物衆、申樂
を待かねて、数万人の心一
同に、遅しと、楽屋を見る
所に、時を得て出て、一声
をもあぐれば、やがて、座

せば、直ちに見物席全体がその時の調
子に引き入れられ、見物全体の心が演
者の振舞にピタリと合致して、しみじ
みとした雰囲気醸成せられる。かう
なれば、何としても、その日の能はも
うしめたもので、きつと成功するもの
だ。

敷も時の調子に移りて、万人の心為手の振る舞ひに和合して、しみぐとなれば、何とするも、其の日の申樂は、既善し。

さりながら、申樂は、御貴人の御出を本と為れば、早

く御出ある時は、やがて初ずしては不叶。さるほどに、見物の衆の座敷、いまだ定まらず、或は遅ればせなどに、人の立居しどろにして、万人の心、いまだ能にならず、されば、左

しかしながら、能樂は、貴人の御臨席を基準として始めるものだから、貴人が早く臨席せられた場合には、見所

の空氣如何に拘らず、早速に始めなければならぬ。従つて、さうした場合には、見物席はまだ静まらず、或は遅ればせに入場する者などもあり、人々の立居も乱雑で、見物人の心はまだ能の方に引入られるに到らない。それで中々容易に、しみじみとした境地になる事はできないものである。かやうな際の脇能に於ては、曲の人物に扮して出ても、常よりは色々とふりをも華やかにし、声も強く謡ひ、足踏をも少々音高く踏み、立ちふるまひの演技をも人の注意を惹くやうに活潑に演じ

右無くしみぐと成る事なし。さやうならん時の脇の能には、物に成りて出づるとも、日来より、色々と振りをも繕い、声をも強く使い、足踏みをも少し高く踏み、立振る舞ふ風情をも、

なくてはならない。これ即ち、見所の注意を舞台に吸引して、騒々しさを静める為の手段である。尚、かやうに演ずる際にも、特に心がけて、貴人の御意に合ふやうな風体をするのが肝要である。従つてかやうな時の脇能は、十分にうまく成功するといふことは、到底あり得ないものだ。しかし、能は貴人の御意に召すやうにする事が眼目のだから、この貴人の御意に合ふやうな風体にするといふことが肝要である。何といつても、見所がちやんと静まつて、自然にしみじみとして来た能

人の目に立つ様に活潑と為べし。是、座敷を静めん為なり。さ様ならんに付ても、殊更、その貴人の御心に合ひたらん風体をすべし。されば、か様なる時の脇の能、十分に善からん事、返々有

には失敗はないものである。だから、見所の空気が能の方へ乗りかかつて来てるか、まだばらばらで散漫な状態にあるかを察知する事は、よほど能の道に長じた人でなくては、容易に出来ないものである。

るまじきなり。然れども、
貴人の御意に叶へるまでな
れば、これ感用なり。何と
しても、座敷の、はや静ま
りて、自らしみたるには、
悪き事なし。されば、座
敷の勢ひ・後れを考へて見

る事、その道に長ぜざらん
人は、左右なく知るまじき
也。

又云、夜の申樂は異なる事
あり。夜は、遅く初まれば、
定まりて湿るなり。脇の申
樂湿りたちぬれば、そのまゝ

又一つ注意をのべると、夜の演能に
は、昼のそれとは全然異なる点がある。
夜の能は遅く始まる時には、必ずめい、
つて、湿つぽくなるものである。初番の
能がめいつたものとなると、その空気
はいつまでもつづいて中中挽回出来な
いものである。だから夜の初番能には、

能は直らず。いかにもく、
よき能を利すべし。よるは
人音騒々なれども、一声に
てやがて静まる也。然ば、
昼の申樂は後が善く、夜の
申樂は指寄善し。指し寄り
湿りたちぬれば、直る時分

十分に心して、善い能をきびきびと演
ずるやうにしなければならぬ。夜
はたとひ見所の人音が騒々としてゐて
も、一声をあげれば直ぐに静まるもの
である。だから、昼間の演能は、初番
よりも後の方が見所が静まるから善
く出来るし、夜の演能は、初番の方が
善く出来るものである。夜能で初番能
がめいつたものになつては、それが直
る時といふものは容易には無い。

左右なく無し。

秘義云、抑、一切は、陰
陽の和する所の堺を、成就
とは知るべし。昼の気は陽
気なり。されば、いかにも
静めて能を為んと思ふ巧み
は、陰気なり。陽気の時分

秘義に、「抑々一切は陰陽の和する
所の堺を成就とは知るべし」といふこ
とが述べられてゐる。昼の気は陽気で
ある。だからその昼に於ては、出来る
だけしつとりと演能しようといふ巧を
こらす、これ即ち陰気である。陽気の
時分に、かく陰気を生ぜしめるといふ
のは、陰陽を和合せしめる心であつて、
これ即ち能のうまく成功することの第
一步であり、見物が面白いと感じるも
とである。夜は又陰気であるから、そ

に、陰氣を生ずる事、陰陽和する心なり。これ能のよく出来る成就の初めなり。これ面白と見る心也。

夜は又陰なれば、いかにも浮きくとやがてよき能を為て、人の心花めくは陽な

り。これ夜るの陰に、陽氣を和する成就なり。されば、陽の氣に陽とし、陰の氣に陰と為ば、和する所あるまじければ、成就も有るまじ。成就なくば何か面白からん。又昼の中にて、

の演能は、如何にもうきうきと面白い能を演じて、見物の心が花やかに浮き立つやうになるのは陽氣である。これ即ち夜の陰氣に陽氣を和合せしめて成功へ導くのである。だから、若し、昼の陽氣に更に陽氣の演奏を以てし、夜の陰氣に更に陰氣な演伎を以てしたならば、和合といふ事がないから、成功といふ事もあり得ない筈であり、又面白などはありません。又昼の中に於ても、時によつて、何となく見所もめい、つて、淋しいやうな時があるが、かやうな時は陰氣の時だと心得

て、湿つぽくならないやうに、特に注意して華かに演じる必要がある。昼間は、かやうに時としては陰氣になる事があるが、夜に於て陽氣になるといふことは、容易にあり得ないことである。

時に因^よりて、何^{なに}とやらん、
座敷も湿^{しめ}りて淋^{さび}しきやうな
らば、これ陰の時と心えて、
静^{しづ}まらぬやうに、心を入^{いれ}て
為^すべし。昼^{ひる}は、かやうに、
時に因^よりて陰氣に成^なる事^{こと}あ
りとも、夜の氣の陽に成ら

ん事、左右^{ひだりみぎ}なく有^あるまじき
也。
座敷を予^{かね}て見るとは、これ
なるべし。

見所の空気を前以て察知するといふ
のは、この間の消息をいふのだ。

〔評〕 問答条々は別紙口伝と共に、花伝書の中でも最も面白く興趣の深々
たる好篇である。年来稽古条々や物学条々を平素の軍事訓練にたとへる

と、問答条々はあたかも実戦の駆け引きに相当する。私はこれ等の章を読むと、観阿弥や世阿弥が如何にすぐれた軍師であるかを痛感させられ、彼等の率ゐてゐた大和猿楽、殊に観世座が、室町初頭の猿楽界に君臨したのも、もつともであると首肯させられるのである。

第一段は、演能の当日に於て、見所の空気を察知して、その日の能の吉凶を予知する事を中心として説かれてゐる。これは能の道に於て通達した上手が、第六感によつて知り得るものであつて、何人でも望み得られるものではないが、その大体を、親切に解剖的に、比較的初心者に

もわかる程度に説明したのが此の一段である。しかも重要なことは、単に吉凶を察知するだけでなく、直ちにその情勢に対してとるべき処置が説かれてゐる点である。

能楽のやうな舞台芸術では、見物の注意を舞台へすつかり吸収してしまへない時には、その演出は必ず破綻を来す。その為に必要なことは、役者の芸の力量である。役者が下手では舞台は持ちきれないのである。しかし、役者が如何に上手でも、舞台の外的条件に細心の顧慮が払はれてゐなくては、その芸は十分の真価が発揮出来ない。この段は、

外的条件への注意と臨機の処置を巧妙に説いて居る。花鏡で説いた「時節感当」は、この段に深い関係を持つ。

夜間と昼間との舞台や見所の気分の相違を説いた条は面白い。今日のやうな照明装置もなく、篝火で演ずる能などには、殊にこの感が深いであらう。只今のやうな照明があつても、夜能と昼能には、どこかに気分の相違があるのだから。これ等の気分の相違を、陰気陽気の二つに綜合して、一般的原理として説いた秘義の一語は、あらゆる場合に、演者の力量一つで千変万化の妙用を生ぜしめるものである。考察が科学的

な表現でないからといって、これを幼稚視する者があつたら、その人は自ら自己の幼稚さを実証することにならう。

猿樂の演奏は、結局、貴人の御意に叶へるまでのものだといふ考は、相当に注意して見なくてはならない。時代の空気や貴人の愛顧如何が、一座の隆替に及ぼす勢力等を考へると、これは当時の猿樂者にとつては一の死活問題である。従つてこれ等の言葉を軽侮の眼を以てながめてはならないと思ふ。そればかりでなく、貴人は比較的高級な観賞眼を持つて、猿樂者を指導し、その芸を高級ならしめようとつとめた人々であ

つたのだから、その意に叶へる事は、能楽の幽玄化に於て相当な役割を演じたものである。今日の営利的なものが、通俗大衆的ならん事を欲して、芸術味の稀薄になることをも辞せないに比べれば、決して、猿楽者流が貴族の意を迎へたことを笑ふことは出来ない筈である。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次 著